

鎌倉時代から江戸時代 — 鎌倉室町時代 門のいろいろ

江戸時代初期の大名・武家の表門は室町時代の門を継承して造られていた。その表門などは鎌倉時代の武家の文化に基づいて発展し、室町時代にいたって数種類の形式の門が形造られた。

その鎌倉・室町時代の表門の形式は、上土門、棟門、四脚（足）門、薬医門などがある。屋敷の周囲に築地塀などを巡らせその門と組み合わせることで屋敷の防御体制が造られた。時代が下るにしたがってそれぞれの屋敷の目的にしたがって多種多様な形式の門が作られてきた。

門は小さな規模の建物だがそれぞれ個性的な造形と構造とが組み立てられて興味深い。その形式の門の特徴を見てみよう。

上土門（あげつちもん）

平安時代の絵巻には絵巻に多く描かれているが、現存上土門を見ることができるところは法隆寺西園院や法輪寺「西門」にある。

平安時代、屋根上を平らに厚板を葺き重ねた上に、土で被せおった門となっていた。この作り方は近世では屋根の上に檜皮（ひわだ）を葺いて土をのせた形になっている。諸大夫※1などの屋敷の門で、築地塀に支えられている門だが、格は一番ひくい。

※1官人の階層の名称



上の図は『松崎天神縁起』 寝殿造の外郭・門、二番目の図は級貴族の屋敷 http://www.kmochi.com/SDN/SDN_031.htmlより

二番目は法隆寺西園院の上土門 江戸前期

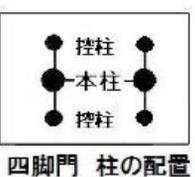
棟門（むねもん）

この門は本柱2本のみで屋根を支える仕組みだが安定性に欠けることから築地塀などで門を支えている。この形式は平安時代の絵巻には多く見られるが、四足門につぐ格式が高い。

右写真、上から三番目は棟門で鹿島市指定重要文化財、四番目は武家屋敷棟門断面図

四脚（足）門（よつあしもん、しきやくもん）

四脚門とは柱が4本ではなく、門柱の前後に控柱を1本ずつあり左右に計4本立てたものをいう。よって柱は本柱を加えて計6本である。中世にかけて、門の形式で格が高いのは棟門でかつ四脚門である。公卿の中でも大臣級が四脚門を設けていた。



上の写真、法隆寺東院の四脚門（Wikipedia より）、中の図は鎌倉の古建築（寺院編）四脚門のサイトより
下の図、年中行事絵巻「寢殿殿造 2.4.2 寢殿造の外郭・門

薬医門（やくいもん）

屋根は切妻造、入母屋造、唐破風の形式がある。薬医門は本柱と控柱各2本ずつある。側柱が片側だけにあり本柱は門の中心より前方にあり、棟の真下にはない。この名称の起源については明らかでない。



上の写真、旧水戸城薬医門

下の図 精選版 日本国語大辞典より

参考資料

寢殿造 3.1 下級貴族の屋敷 http://www.kimchi.com/SDN/SDN_031.html

寢殿造 3.2 武士の館と中門廊 http://www.kimchi.com/SDN/SDN_032.html

論文・江戸に於ける武家屋敷表門に於いて、より